



第 41 号
平成26年10月31日 発行
発行 埼玉県立がんセンター
発行責任者
病院長
田中 洋一

基本“唯惜命”
理念

私達は生命の尊厳と倫理を重んじ、十分な医療情報提供と患者さんの自己決定権を尊重し博愛と奉仕の精神で医療を行います。

目次

- 治療の道標〈乳腺外科診療における取り組み〉…………… 1
- がん体験者によるピアサポーター活動／小児がんの治療成績改善に向けて
〈腎芽腫の発症・悪性化に関する遺伝子異常の解明〉…………… 2
- 「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2014さいたま」に参加して…………… 3
- 音楽ボランティアの活動紹介／患者数の状況…………… 4



埼玉県のマスコット コバトン



治療の道標

乳腺外科診療における取り組み

わが国では乳癌の罹患率、死亡率とも上昇を続けています。発生を予防できれば良いのですが、有効な予防法は確立されていません。

乳癌になるリスクを高める因子（閉経後の肥満、アルコール、喫煙、糖尿病など）を減らすことは、生活習慣病予防にもなる良い対策です。二次予防としては、検診などで早期発見をして治癒率を高めることが重要です。がんセンターでは二次検診（精密検査）を行っており、正確な最終診断をしています。

乳癌の診断で最も基本となるのは乳房X線検査（マンモグラフィ）と超音波検査（エコー）です。マンモグラフィの撮影技術は向上し、少ない痛みで良い写真を撮る努力がされています。私達が見るTV画像はもちろん他の医療画像と比較してもより高い解像度を必要とするため、乳腺外科外来では特別な高解像度モニターを常備し、十分な画像情報を得る環境を整えています。エコーは、comprehensive ultrasonographyとしてエラストグラフィ（病変の硬さを判定）やドップラー法、造影超音波検査（血流を判定）などの所見を総合して評価する試み、薬剤治療効果判定の研究など新しい評価法を導入しています。

遺伝性乳癌などの高危険群対策は重要です。過度に心配する必要はありませんが、近親者に乳癌の人がいる場合などは、乳癌認定看護師を窓口として腫瘍診断・予防科でカウンセリングや遺伝子検査を行うことも可能です。

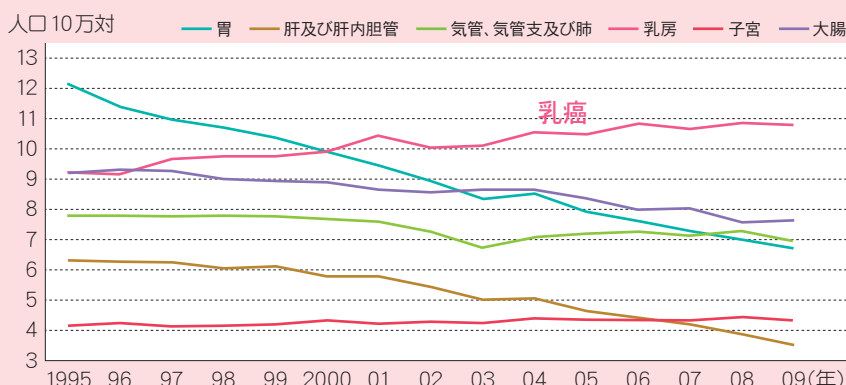
手術には①癌を取り除く②個々の癌についての情報を得るという二大目的があります。①について、完全な切除のためMRIなどによる拡がり診断が重要です。現在は3.0Tesla装置を含む2台のMRIで日を待たずに高度な検査ができ、温存手術の可否、切除範囲決定に役立っています。②については、癌の確定に加えてサブタイプなど個々の性質を診断する正確な病理組織検査などが個別化治療方針決定の礎となっています。手術の目的を果たしつつ生活の質を保つことも求められます。良い整容性を求めて乳房温存手術の質が向上し、乳房切除後の再建が普及しました。乳房再建の認知度が高くなりインプラント再建が保険適応となったため需要が高まっています。また腕の浮腫回避も重要で、センチネルリンパ節生検、腋窩郭清の省略、リハビリ指導によりこの合併症が減りました。

乳癌患者さんの多様な問題に対してガイドや道標としてより良い道を歩めることを推進する医療者の核であるべく、乳腺外科も歩んでおります。



乳腺外科科長兼部長
松本 広志

■都道府県別 75 歳未満年齢調整死亡率(女性・主要部位)【全国 1995 年～2009 年】



資料：独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センター

Source: Center for Cancer Control and information Services, National Cancer Center, Japan

がん体験者による

ピアサポーター

活動



がんセンターでは、週2回、ピアサポーターが、正面玄関から入って左側のホスピタルストリートで活動しています。

ピアサポートとは、がんという病気を体験した人や家族などがピア（仲間）として「体験を共有し、ともに考える」ことで、患者さんやご家族などを支援していくことをいいます。そして、ピアサポートを行う人を「ピアサポーター」といいます。

がん患者さんやそのご家族に対する支援は、医療者などによる専門的なサポートが大きな位置を占めますが、当事者同士が体験や感情を共有することによ

るサポートもまた、患者さんやご家族にとって大きな助けとなります。がんと診断された方やそのご家族の“何をどうすればいいのかわからない”“同じがんという病を抱えている人と話したい”という思いに、体験を共有して共に考えるというピア（仲間）ならではの支援は、大きな意味があります。

埼玉県ではピアサポートを推進するための研修を実施しており、その研修を修了した方が活動しています。どうぞお気軽にお立ち寄りください。



小児がんの治療成績改善に向けて

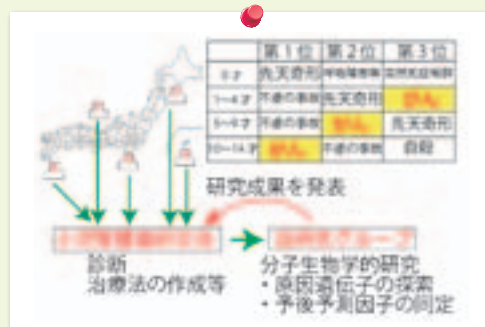
-腎芽腫の発症・悪性化に関与する遺伝子異常の解明-



臨床腫瘍研究所
春田 雅之

小児がんは患者数が少なく（年間新規患者数：小児がん2500人、大人のがん80万人）、それぞれのがんが非常にまれ（小児腎腫瘍の代表である腎芽腫：年間70人）であることから、これまで小児がんの研究は大人のがんのように進んでいませんでした。ところで、2012年に「子どもは国民の宝であり、がんは小児において病死原因の第一位を占める」ことから、「がん対策推進基本計画」の重点的課題に小児がん対策（新たな治療法・治療薬の開発や研究の推進を含む）が取り上げられました。小児がんの治癒率は70%とよくなりましたが、現在の治療法により治癒させることのできない小児がんが存在すること、また生存者は長く生存するので治療による副作用や晩期障害（成長・発達障害、2次がん、不妊など）の問題を抱えていることから、小児がん研究の発展が望まれています。

私たちは小児腎腫瘍研究会のメンバーとして、日本全国から送られた小児腎腫瘍の分子生物学的解析を行い、その結果を診断や治療法の改善に役立てるため研究を行っています。これまでに腎芽腫の染色体異常・遺伝子異常・エピジェネティック異常の特徴と、治療に抵抗性を示す分子機構を明らかにしました。今後とも、小児がん治療成績の向上に寄与したいと願っています。





『リレー・フォー・ライフ・ジャパン 2014 さいたま』 に参加して



副病院長兼看護部長
柏浦 恵子

去る9月14・15日、さいたま市・農業者トレーニングセンター「緑の広場」にて「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2014さいたま」（以下、RFLと略す）が開催されました。1985年、一人のアメリカ人医師が、がん患者支援のため24時間走り続け寄付を集めたことに始まったRFL。日本でも40か所以上で開催、さいたま会場も今年度で開催6回目を数え、がんセンターも初回から後援しています。

「がんと闘い生きていることを祝福し、旅立った愛する人たちを偲び、がんには負けない社会をつくる」の使命のもと、チャリティイベントで集められた資金は「日本対がん協会」に託され、若手医師の海外研修派遣や基礎研究資金助成、がん検診受診率向上の啓発活動など、がん制圧のための様々な取り組みに充当されます。

がんセンターは昨年度に引き続き、がんセンターとTNS（地域連携・相談支援センター）の2チームが参加し、24時間それぞれの思いを胸にリレーウォークを行ってタスキを繋ぎました。

また、ステージパフォーマンスにも初参加し、「アナと雪の女王 Let It Go」を全員で熱唱、喝采を浴びました。さらに、テント内では「青空がん啓発セミナー」を6セミナー開催しました。

●「がんを予防して検診を受けよう」……………田中病院長

●「子宮頸がんと頸がん検診について知ろう」

……………横田副病院長

●「生きるを支える栄養学」……………武井管理栄養士

●「抗がん剤治療と日常生活に関する看護相談」

……………山崎がん化学療法看護認定看護師

●「効果的な乳がんの自己検診を学ぼう」

……………横枕乳がん看護認定看護師等

●「がんよろず相談」 ……地域連携・相談支援センター相談員



田中病院長によるがん啓発セミナーの様子



がんセンター及びTNSによるリレーウォーク



会場の様子

どのセミナーも多くの方々に集まっていただき好評でした。

今年は、以上のような当日参加の職員に加え、募金参加や準備ボランティアなど合わせ、総勢約200名余りの職員の参加となりました。これらのイベントを通じ、適切ながん医療に繋げるための情報提供、予防や早期発見に向けた啓発、患者や地域との連携など、都道府県がん診療連携拠点病院としても一つの役割を果たせたのではないかと思います。

がん制圧という共通の願いを胸に様々な立場の方々が集うこのRFL。多くの皆様方の参加に感謝するとともに、次年度も様々な参加の輪が広がればと思っています。

副病院長兼看護部長

（平成26年度RFLさいたま実行委員長）

柏浦 恵子



音楽ボランティアの

活動紹介



がんセンターでは、毎月4～5回、音楽ボランティアによるコンサートを開催しています。音楽ボランティアは、団体によってジャンルも異なり、クラシックや童謡、歌謡曲、バンドなど様々な演奏を楽しめます。また、年に2回、季節に合わせたスペシャルコンサートを開催しています。

7月には、七夕スペシャルコンサートを開催しました。いつも活動していただいている石井修、英子ご夫妻（テノール、ピアノ）と、堀内成美、喜笑姉妹（ファゴット二重奏）、コーラスグループ「四葉会」など 30 人程のボランティアさんに演奏者として集まっていただきました。

石井修さんの迫力ある歌声や、四葉会のきれいなコーラスによって童謡や歌謡曲が披露され、患者さんが歌詞を口ずさんだりして楽しんでいる様子でした。

また、12月にはクリスマススペシャルコンサートの開催を予定しており、ボランティアさんと準備を始めているところです。

新病院に移転して、ボランティアコンサートに参加してくださる患者さんは一段と増えました。今後も、患者さんのために活動し続けてくださるボランティアと協力して、患者さんにやさしい病院づくりに努めていきます。



演奏の様子（四葉会の皆さま）



演奏の様子（堀内成美さん）

患者数の 状況

平成 25 年度の入院・外来患者数が判明しました。

入院患者さんの年間延べ人数は、11 万 4,846 人で、一日平均入院患者数は 315 人でした。平均在院日数は 14.5 日となっています。

外来は延べ 18 万 4,591 人の患者さんが来院されております。うち約 4%が初診の患者さんで、その数は年間 6,770 人となっています。また、一日平均外来患者数は 756 人でした。

※ 25 年度は、新病院移転前後の診療機能制限に伴い患者数が減少しています。

入 院

	25 年度総数	前年度増減
入 院	7,947	▲408
退 院	7,935	▲443
入院延べ患者数	114,846	▲8,057
1 日 平 均 患 者 数	314.6	▲22.1
病 床 利 用 率 (%)	73.9	▲10.3
平 均 在 院 日 数	14.5	▲0.2

外 来

	25 年度総数	前年度増減
外 来 延 べ 患 者 数	184,591	▲5,871
1 日 平 均 患 者 数	756.5	▲20.9
診 療 日 数	244	▲1